

Title	青年期男女の性別役割観とライフコース観：パーソナリティ特性との関連から
Sub Title	
Author	八木, 孝憲
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.161- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文献

- 礪田耕治, 2008, 『スタインウェイピアノのゆくえ』 エピック.
- Boehm, Theobald, 1964, *The Flute and flute Playing; in Acoustical, Technical, and Artistic Aspects*, Dayton C. Miller ed., New York: Dover.
- 平島達司, 2004, 『ゼロ・ビートの再発見～「平均律」への疑問と「古典音律」をめぐる復刻版』 ショパン.
- 西原稔, 1995, 『ピアノの誕生』 講談社.
- Powell, Ardal, 2002, *The Flute*, New Haven/ London: Yale University Press.
- Sadie, Stanley ed., 1980, *The new GROVE dictionary of music and musicians*. (= 1994, 柴田南雄・遠山一行総監修, 『ニューグローヴ世界音楽大事典 第4巻』 講談社.)
- Sadie, Stanley ed., 1980, *The new GROVE dictionary of music and musicians*. (= 1996, 柴田南雄・遠山一行総監修, 『ニューグローヴ世界音楽大事典 第15巻』 講談社.)
- Weber, Max, [1921] 1956, "Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik," *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winkelmann, Anhang, Tübingen: J.C.B.Mohr, 877-928. (= [1967] 2000, 安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳解『音楽社会学』 創文社.)

青年期男女の性別役割観とライフコース観

—パーソナリティ特性との関連から—

八 木 孝 憲

I. 問題と目的

1970年代以降, 男女の役割について日本人の平等観が大きく変化し, 特に女性の意識が以前より平等的になってきている。その背景には, 女性のライフスタイルが多様化し, 結婚・家庭・仕事に対する考え方が流動化してきていると考えられている。そのため, 晩婚化, 非婚化, また急速に進む少子高齢化が社会問題として取り上げられるのに伴い, 青年層の性役割態度の変化や, 結婚観の多様化との関連について注目されるようになってきた。性役割態度が変化したことによって, 就業観のみならずライフコース観や結婚観の変化に言及する研究は近年増加している。しかし, どのようなパーソナリティ特性がいかなる性役割態度を示すのかを関連づけた研究は少ない。性役割態度を基盤とした就業観・ライフコース観・結婚観だけではなく, 個性としてのパーソナリティ特性との関連性を検討することにより, より詳細な分析が可能になり, パーソナリティ特性ごとの大まかなライフスタイルを予測できるものとする。

社会学は人間社会を研究するものであるゆえに, なんらかの意味で「人間とはなにか」という問題にぶつからざるを得ない。家族が少なくとも今まで, 巨視的に見て人間と深いつながりのある制度であり, また微視的にみて人間が生まれると同時に直接に関わり, その人格形成に大きな影響をもつ環境であるとすれば, 家族を研究するものとしては, 少なくとも人格についてそれなりの深い理解と立場を持っていなければならない。人格の問題を回避して家族を論ずることは, 不可能とは言わないまでも, きわめて不完全なものに止まらざるをえないと思われる。その意味では, 本研究は何らかの意義があると考えられる。ジェンダータイプと性役割観・家族観との関連性を検討した研究(八木, 2007)はあるが,

ジェンダータイプはあくまでも人格の一側面に過ぎない。人格特性を基盤として、性役割観・ライフコース観・家族観などの関連性を検討している研究は見受けられないため、本研究により人格特性と家族の諸問題との関連について新たな知見が得られるものと考えている。

II. 対象と方法

1) 対象と方法

2009年4月から12月に、全国の国公立私立大学29校の大学生を対象に行った。男子大学生：192名、女子大学生：133名の計325名。方法は知人の大学生に研究の主旨を説明し、同意が得られた知人の友人大学生にアンケート用紙を配布・記入してもらい、郵送にて回収した。紙面にて、無記名であること、回答内容は全体の傾向を把握する目的で使用するため、個々の情報が特定されることは無いことを説明した。

2) 調査項目

(a)対象者の基本属性：大学、学年、年齢、性別、家族構成(b)対象者の両親の就業形態(c)KT性格検査：自己抑制型、自己解放型、着実型、繊細型、信念確信型、の5類型。(d)性役割観尺度：脱性役割分業、男性の家庭役割分担、女性の職業進出、の3項目。(e)アンケート調査

III. 結果

a) KT性格検査と性役割観尺度の相関関係
男性) $n = 192$

		相関係数					
		S(自己抑制)	Z(自己解放)	E(着実)	N(繊細)	P(信念確信)	L(虚偽)
S(自己抑制)	Pearsonの相関係数	1	-.224**	-.016	.404**	-.261**	0.018
	有意確率(両側)		0.002	0.823	0.000	0.000	0.805
	N	192	192	192	192	192	192
Z(自己解放)	Pearsonの相関係数	-.224**	1	.177*	-.201**	0.115	0.089
	有意確率(両側)	0.002		0.014	0.005	0.112	0.221
	N	192	193	193	193	193	193
E(着実)	Pearsonの相関係数	-.016	.177*	1	0.038	-.002	0.138
	有意確率(両側)	0.823	0.014		0.603	0.980	0.055
	N	192	193	193	193	193	193
N(繊細)	Pearsonの相関係数	.404**	-.201**	0.0381	0.038	0.053	
	有意確率(両側)	0.000	0.005	0.603	0.599	0.467	
	N	192	193	193	193	193	193
P(信念確信)	Pearsonの相関係数	-.261**	0.115	-.002	0.038	1	0.034
	有意確率(両側)	0.000	0.112	0.980	0.599		0.636
	N	192	193	193	193	193	193
L(虚偽)	Pearsonの相関係数	0.018	0.089	0.138	0.053	0.034	1
	有意確率(両側)	0.805	0.221	0.055	0.467	0.636	
	N	192	193	193	193	193	193
男性の家庭役割分担	Pearsonの相関係数	-0.005	0.090	0.120	0.122	0.002	-.142*
	有意確率(両側)	0.947	0.213	0.097	0.091	0.978	0.049
	N	192	193	193	193	193	193
女性の職業進出	Pearsonの相関係数	-0.067	0.093	0.120	0.015	0.037	0.050
	有意確率(両側)	0.358	0.199	0.097	0.832	0.607	0.492
	N	192	193	193	193	193	193
脱性役割分業	Pearsonの相関係数	0.060	0.062	-0.028	-0.085	-.170*	-0.102
	有意確率(両側)	0.410	0.390	0.700	0.240	0.018	0.156
	N	192	193	193	193	193	193

男性：5つの性格特性と性役割観尺度の相関係数および有意水準は以下の通りである。

着実型と男性の家庭役割分担 ($\gamma=.120, p<.10$)、着実型と女性の職業進出 ($\gamma=.120, p<.10$)、繊細型と男性の家庭役割分担 ($\gamma=.122, p<.10$) において有意な相関関係が見られた。

*相関係数は5%水準で有意(両側)です。

**相関係数は1%水準で有意(両側)です。

女性) $n = 133$

相関係数

		S (自己抑制)	Z (自己解放)	E (着実)	N (繊細)	P (信念確信)	L (虚偽)
S (自己抑制)	Pearson の相関係数	1	-.202*	0.083	.282**	-.048	0.014
	有意確率 (両側)		0.02	0.341	0.001	0.582	0.87
	N	133	133	133	133	133	133
Z (自己解放)	Pearson の相関係数	-.202*	1	-.183*	-.376**	-.005	0.097
	有意確率 (両側)	0.02		0.035	0	0.953	0.265
	N	133	133	133	133	133	133
E (着実)	Pearson の相関係数	0.083	-.183*	1	.250**	.203*	0.142
	有意確率 (両側)	0.341	0.035		0.004	0.019	0.103
	N	133	133	133	133	133	133
N (繊細)	Pearson の相関係数	.282**	-.376**	.250**	1	-.097	-.044
	有意確率 (両側)	0.001	0	0.004		0.268	0.615
	N	133	133	133	133	133	133
P (信念確信)	Pearson の相関係数	-.048	-.005	.203*	-.097	1	-.003
	有意確率 (両側)	0.582	0.953	0.019	0.268		0.974
	N	133	133	133	133	133	133
L (虚偽)	Pearson の相関係数	0.014	0.097	0.142	-.044	-.003	1
	有意確率 (両側)	0.87	0.265	0.103	0.615	0.974	
	N	133	133	133	133	133	133
男性の家庭役割分担	Pearson の相関係数	0.024	0.152	0.009	-.107	0.136	0.031
	有意確率 (両側)	0.784	0.081	0.921	0.222	0.118	0.724
	N	133	133	133	133	133	133
女性の職業進出	Pearson の相関係数	0.005	.368**	-.158	-.061	-.021	0.112
	有意確率 (両側)	0.959	0	0.069	0.483	0.812	0.199
	N	133	133	133	133	133	133
脱性別役割分業	Pearson の相関係数	0.126	0.004	0	0.122	-.031	-.124
	有意確率 (両側)	0.147	0.961	0.999	0.163	0.721	0.157
	N	133	133	133	133	133	133

*相関係数は 5%水準で有意 (両側) です。

**相関係数は 1%水準で有意 (両側) です。

女性: 5つの性格特性と性別役割観尺度の相関係数および有意水準は以下の通りである。

自己解放型と女性の職業進出 ($r=.368, p<.001$)、自己解放型と男性の家庭役割分担 ($r=.152, p<.10$) において有意な相関関係が見られた。

b) アンケート調査結果

専業主夫という存在を知っている (男性)

いいえ	どちらでもない	はい	
13	4	174	191
7%	2%	91%	

専業主夫であるという人が身近にいる (男性)

いいえ	どちらでもない	はい	
174	8	9	191
91%	4%	5%	

専業主夫という生き方に賛成できる (男性)

いいえ	どちらでもない	はい	
24	59	108	191
13%	31%	57%	

専業主夫になりたい

いいえ	どちらでもない	はい	
102	67	22	191
53%	35%	12%	

専業主夫という存在を知っている (女性)

いいえ	どちらでもない	はい	
4	4	125	133
3%	3%	94%	

専業主夫であるという人が身近にいる (女性)

いいえ	どちらでもない	はい	
123	4	6	133
92%	3%	5%	

専業主夫という生き方に賛成できる (女性)

いいえ	どちらでもない	はい	
8	41	84	133
6%	31%	63%	

専業主婦になりたい

いいえ	どちらでもない	はい	
46	50	37	133
35%	38%	28%	

IV. まとめ

KT性格検査と性別役割観尺度の相関関係から、男性においてはそれぞれ着実型・繊細型と男性の家庭役割分担とのあいだに10%水準で相関関係があった。着実型の特徴としては、粘り強く忍耐力・持久力があり、一つのことを途中でやめないで、最後までやり抜く傾向がある。几帳面で秩序を大切にするため、整理整頓されていないと気になるといった面があり、家事・育児など家庭役割に比較的適応しやすい性格特性であることがみとれる。繊細型の特徴は、感受性が豊かで細かいところによく気がつき、

相手の立場をよく考えて行動する方である。また思いやりがあるため、特に育児に適応しやすいと思われる。着実型は女性の職業進出とも10%水準で相関関係があり、配偶者にも手堅く仕事をしてもらい経済的安定を図ろうという共稼ぎ志向の表れであろう。

次に女性においては、自己解放型と女性の職業進出に1%水準で相関関係があった。自己解放型の特徴としては、ふだんは楽観的で、陽気で活発であり、融通もきく方である。仕事面では、リーダーとして期待されやすく、人と協同行う適性があるため企業社会で適応しやすく、また女性の就労に前向きな考えを抱いていると思われる。さらに、自己解放型は男性の家庭役割分担とも10%水準で相関関係があり、これは自身の就労意欲の高さゆえ、共稼ぎを想定した男女平等主義的な思考の表れであろう。

以上のように、男女ともに性格特性と性役割観に大きな相関関係が見られたことは興味深い結果である。つまり就労指向性や夫婦戦略などに、潜在的な性格特性が影響を及ぼしている可能性が示唆されたといえよう。

最後に近年の家族の多様化のなかで注目されるようになってきた、専業主夫に関するアンケート結果を見てみよう。男女ともに専業主夫の認知度は90%を超えており、社会的認知度は高まっている。しかし、実際に周囲に存在しているのは非常に稀で、男女ともに5%という低い結果となった。また、客観的に見た場合には、専業主夫という生き方には賛成であるが(男子: 57% 女子: 63%)、実際自分自身が専業主夫になりたいと回答した男子学生はわずか12%であった。女子で専業主婦を希望する者は28%であり、比較的就労意欲が高いという結果となった。

伝統的な性別役割分業意識は近年低下してはいるが、依然として現在の青年期男女においてまだまだその呪縛から解放されたとは言い難い。他人の人生設計や性役割観に対する意識は受容度が高いものの、それが自身のこととなると、まだまだ周囲を気にしてしまう葛藤があると思われる。

今後の課題としてはさらに詳細に分析し、性格特性がどのようにして職業観や結婚観ひいては家族戦略に影響を及ぼしているのか、またどのような性格特性がいかなる場面で葛藤を抱えるのかを明確にすることである。葛藤の解消や低減は、個人の生き方の選択肢をひろげ、個々が理想とする家族形態の実現への大きな原動力になるはずである。

文献

- 儘田 徹・中山和弘(2006) 異なる性役割態度の並存とその関連要因に関する検討 国立女性教育会館研究ジャーナル vol.10.August
- 諸井克英(2004) 青年における就労働機におよぼす性役割の影響 総合文化研究所紀要第21巻
- 向井心一(2007) 現代の青年期における性役割認知と過去の青年期における性役割認知の比較 臨床教育心理学 vol.33 No.1
- 中井美樹(2000) 若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観 「立命館産業社会論集」第36巻第3号
- 先本亜由美(2007) 母親の就労と親子関係が女子学生の性役割観やライフコース観に与える影響 臨床心理教育研究 vol. 33 No. 1
- 佐野まゆ・高田谷久美子・近藤陽子(2007) 大学生における性役割志向によるライフコース観の比較 Yamanashi Nursing Journal Vol. 6 No. 1
- 戸上多佳(2001) 新しい女性像の実態に関する研究 日本性格心理学会大会発表論文集(10)